

# 本学における看護教育の特徴（1）

## －看護学科教育課程編成の考え方と特色－

佐藤 みつ子, 入江 多津子

了徳寺大学・健康科学部・看護学科

### 要旨

近年の看護系大学が急増する社会状況の中で、新設の看護系大学である本学が他大学と共存し、また独自性・固有性をもつ大学であるためには、教育の神髄である「教育課程」に特色を持たせることが重要である。本学は健康科学部（理学療法学科・整復医療・トレーナー学科）、芸術学部（美術学科）があり、平成23年4月健康科学部に看護学科が新しく設置された。そこで、本稿は、教員間の看護教育に対する共通理解を深めるとともに、学生の教授活動に役立てるために、看護学科の教育課程編成の考え方と特色に焦点をあて、本学における看護教育の特徴について述べることを目的とする。教育課程の編成にあたっては、既存学科の教育に対する考えや教育内容を生かすようにした。また看護学科の教育課程の特色として、本学の「医療と芸術の融合」の基本理念に基づき、豊富な教養科目、特に、芸術系の科目を組み込み、人間の持つやさしさや温かさの基本となる感性の教育を視野に入れたことである。さらに大学の教育理念や健康科学部の教育目的と看護学科の教育目的・目標の一貫性、看護実践能力を重視した臨地実習の考え方について述べた。加えて、教育課程と関連の深い入学者選抜（アドミッションポリシー）、卒業要件、独自の教育方針である「自律・自立の精神」「知探心技の精神」について述べた。

キーワード：看護教育，教育課程，健康科学部，看護学科，感性

## Nursing Education at Ryotokuji University (1)

### －Visions and Characteristics of the Department of Nursing Curriculum－

Mitsuko Sato, Tazuko Irie

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University

### Abstract

Changing social circumstances have seen a rapid increase in the number of universities with nursing programs over recent years. For our newly established university to stand among others and have originality and identity, it is important to have a distinctive curriculum—the essence of education. Our university has a Faculty of Health Sciences (Department of Physical Therapy and Department of Judo Therapy and Sports Medicine) and a Faculty of Art (Department of Fine Arts), and in April 2011 a Department of Nursing was established within the Faculty of Health Sciences. Our study aimed not only to promote better understanding of nursing education by teaching staff, but also to improve student education by focusing on the visions and distinctive characteristics behind the formation of the Department of Nursing curriculum and to define the characteristics of nursing education at our university. When we formed the curriculum, we aimed to utilize

the visions and educational contents of the existing departments. Also, as a distinctive characteristic, we incorporated an abundance of liberal arts—especially arts subjects based on emotional awareness—in light of the fact that empathy-based education is the foundation of human kindness. This is in line with our essential philosophy of “synthesizing medicine and fine arts.” Furthermore, we emphasize the fact that our educational philosophy, the consistency of our educational objectives, the curriculum of the Faculty of Health Sciences and the Department of Nursing, and our clinical training are all focused on practical nursing ability. We also cover the admission policy, the academic requirements for graduation, and our unique educational policies of “a spirit of self-sufficiency and independence” and “knowing and inquiring of oneself and others.”

Keywords : Nursing Education, Curriculum, Faculty of Health Sciences, Department of Nursing, Sensitivity

## I. はじめに

看護系大学は、毎年増加し平成23年度は約200校と増加を続けている。その背景には、少子・超高齢化、疾病構造の変化、高度先端医療の加速、国民の健康意識や価値観の変化等により、看護へのニーズが多様化・複雑化し、さまざまな看護の分化と高度な看護実践能力が求められるためである。また、医療提供体制の在り方や専門職者間の連携や役割分担、在宅医療の充実のため、看護教育に対する質の向上が求められている。さらに看護系大学が急増する中で、新設の看護系大学である本学が他大学と共存し、独自性・固有性をもつ大学であるためには、教育の神髄である「教育課程」に創造的な発想や先見性を持たせることが重要と考える。本学は健康科学部（理学療法学科・整復医療・トレーナー学科）、芸術学部（美術学科）があり、平成23年4月健康科学部に看護学科が新しく設置された。そこで本稿は、教員間の看護教育に対する共通理解を深めるとともに、学生の教授活動に役立てるため、看護学科の教育課程編成の考え方と特色に焦点をあてて、本学における看護教育の特徴について述べることを目的とする。

教育課程の編成にあたっては、既存学科の教育に対する考えや教育内容を生かすようにした。特に、看護学科の教育課程の特色として、本学の「医療と芸術の融合」の基本理念に基づき、豊富な教養科目、日本文化の「書道」や「華道」、「こころアート」等、芸術系の科目を取り入れ、人間の持つやさしさや温かさの基本となる感性の教育を視野に入れたことである。また、中央教育審議会答申の「学士課程教育の編成に向けて—中央教育審議会答申の概要」の趣旨および内容を参考にする。答申では、「①グローバル化する知識基盤社会において、学士レベルの資質能力を備える人材養成、②目先の学生確保が優先される傾向がある中、大学や学位の水準が曖昧になったり、学位の国際的通用性が失われたりしてはならない、③各大学の自主的な改革を通じ、学士課程教育における3つの方針（DP・CP・AP）の明確化等を進める」等である<sup>1)</sup>。さらに中央教育審議会から提示された学士課程教育の編成に向けての考え方や学士力についても考慮した<sup>2)</sup>。

## II. 本学の教育理念・目的

### 1. 本学の教育理念

本学の教育理念は、「日本固有の美や和の精神を継承し、この国と国民が新たな価値を生み出すために、未来を拓く若人に美しい環境と真摯に学ぶ場を提供する。いつも自立の心と連帯を重んじ、いかなる時も希望を持ち、友愛を深める人を目指す。そして地域、国、やがて世界へ貢献すること」であ

る。この教育理念は、看護学科の開設においても教育目的や目標に踏襲する（図1 教育理念と看護学科の教育目的・目標の関連）。

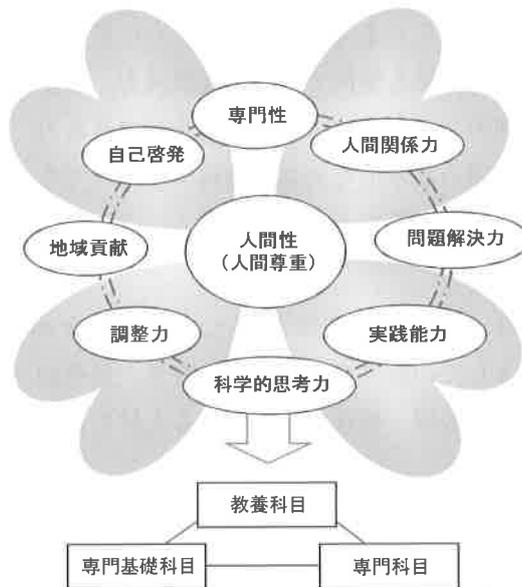
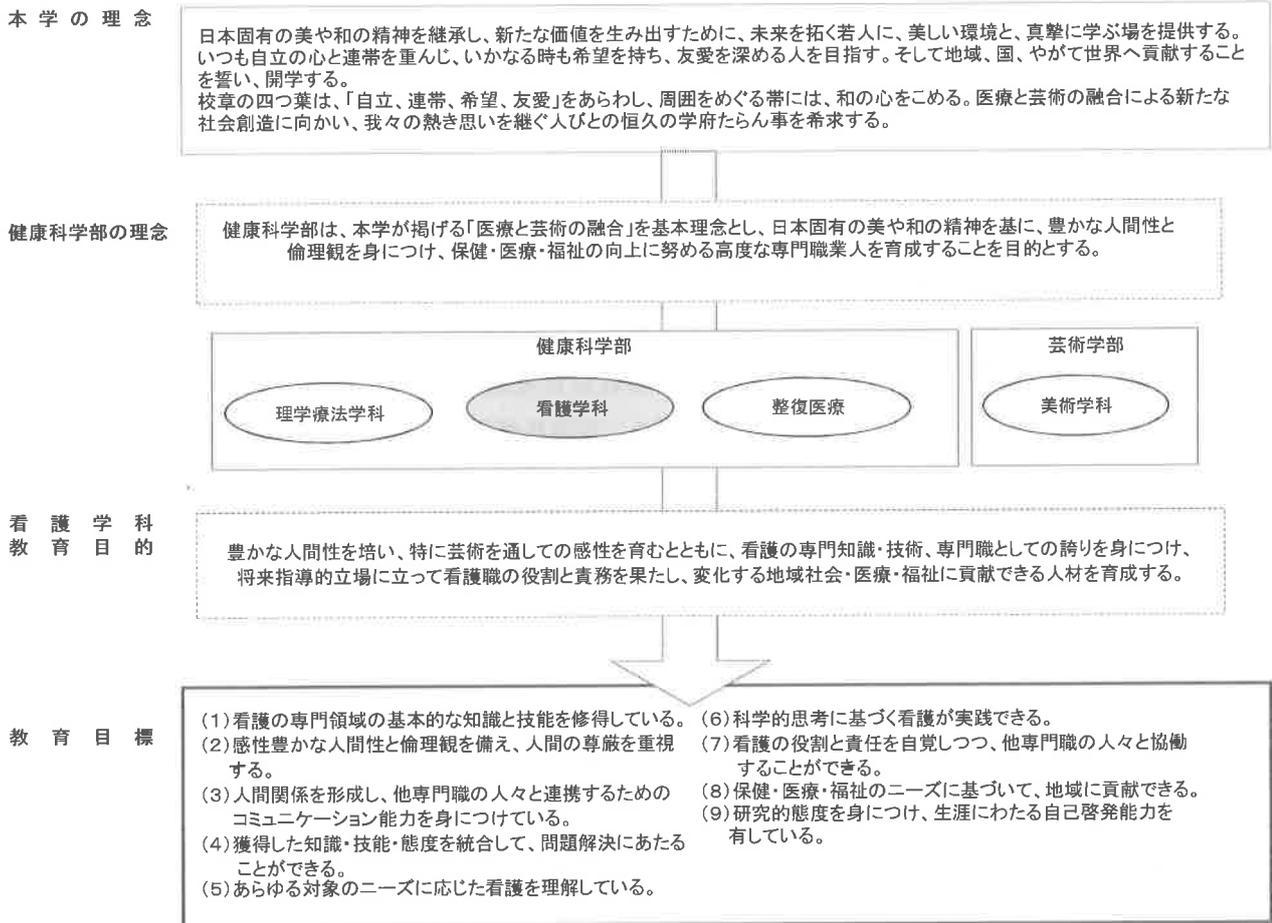


図1 教育理念と看護学科の教育目的・目標の関連

## 2. 健康科学部の教育目的

健康科学部は、本学が掲げる「医療と芸術の融合」を基本理念とし、日本固有の美や和の精神を基に、豊かな人間性と倫理観を身につけ、保健医療福祉の向上に努める高度な専門職業人を育成することが目的である。本稿における「医療と芸術の融合」とは、学生が、看護学についての専門的な知識や技術を身につけるだけでなく、その専門性を発揮するための基盤となる幅広い教養を身につけ、芸術を通して感性豊かな人間性を育成することを意味する。人間を対象とする看護である以上、専門職にふさわしい感性豊かな人間性を育むことが重要だからである。

## Ⅲ. 看護学科の教育目的・目標

看護をとりまく社会環境の変化により、看護基礎教育は、職業教育から専門職教育へとしだいにシフトしてきており、専門職業人としての基礎を身につける教育が重要になっている。看護学科の教育目的・目標の検討にあたっては、平成20年7月、厚生労働省の「看護基礎教育のあり方に関する懇談会」において、看護職に求められる資質・能力として示された「看護が人に接する職業であるため、豊かな人間性、包容力、人としての成熟が重要である」という趣旨を考慮する<sup>3)</sup>。また次に述べることも踏まえ目的・目標を設定する。看護学科は、超高齢社会および医療の高度化に対応した看護学を研究・開発し、実践する専門職を育成することをめざしている。そのため、看護する者の基本として、人間は独自の存在でひとりとして同じ人間はいない尊い存在であるという人間観や、それぞれが持っている価値観を認め相互に理解し合える高い倫理観を根底にもっている。また看護の対象はさまざまな健康状態にある人々（健康増進・疾病予防・健康障害・回復期・ターミナル期）や、ライフサイクルの全期にある人々（新生児・幼児期・青年期・成人期・老年期）であり、看護する者は、心身面だけではなく、生活者としての視点を持つことも重要である。対象を全人的に理解するには、一般教養を身につけ感性豊かな人間性を育み、人間の生死に関する知見や、コミュニケーション力を磨くことが必要である。個人のみではなく、地域社会で生活する人々の健康ニーズを知り、地域貢献することも大切である。さらに自ら主体的に学び、考え、柔軟かつ総合的に判断できる能力や、自ら課題を発見し解決できる問題解決力、科学的根拠を持って実践できる力、物事を論理的に思考できる力、批判的に思考しつつ新たな発想ができる力、自己を客観視できる力を身につけられるようにする。学生が、学問の基本的な知識を獲得するだけでなく、知識の活用能力や創造性、生涯を通じて学び続ける基礎的な能力を培えるよう育成する。

### 1. 教育目的

看護学科の教育目的は、「豊かな人間性を培い、特に芸術を通しての感性を育むとともに、看護の専門知識・技術、専門職としての誇りを身につけ、将来、指導的立場に立って看護職の役割と責務を果たし、変化する地域社会の医療・福祉に貢献できる人材を育成する」ことである。

### 2. 教育目標

看護学科の4年間で育成したい目標とする人物像は1)から9)である。

- 1) 看護の専門領域の基本的な知識と技能を修得している。
- 2) 感性豊かな人間性と倫理観を備え、人間の尊厳を重視する。
- 3) 人間関係を形成し、他専門職の人々と連携するためのコミュニケーション能力を身につけている。
- 4) 獲得した知識・技能・態度を統合して、問題解決にあたることができる。
- 5) あらゆる対象のニーズに応じた看護を理解している。

- 6) 科学的思考に基づく看護が実践できる。
- 7) 看護の役割と責任を自覚しつつ、他専門職の人々と協働することができる。
- 8) 保健・医療・福祉のニーズに基づいて地域に貢献できる。
- 9) 研究的態度を身につけ、生涯にわたる自己啓発能力を有している。

#### IV. 教育課程編成の考え方と特色

##### 1. 教育課程編成の考え方

教育課程（カリキュラム）の具体的な編成および展開に際しては、1) 大学の基本理念である「医療と芸術の融合」や健康科学部の教育目的と看護学科の教育目的・目標との整合性・一貫性を考慮する。2) 教育内容は、「教養科目」「専門基礎科目」「専門科目」「統合科目」の4分野に大別し、教養科目および専門基礎科目と専門科目の関連性、統合科目の位置づけを明確にする。3) 学生が看護の基礎となる「教養科目」「専門基礎科目」を修得し、さらにこれらの科目を踏まえて「専門科目」の基礎が履修できるよう学習の順序性を工夫する。4) 学習内容が、断片的でなく学習の積み重ねができるよう科目間の関連を考え体系的に学習できるようにする。5) 技術的な能力だけでなく自ら課題を発見し問題を多角的に考え解決する力が身につくようにする。6) 個々の授業科目は、教育目標との関連や科目のねらい、位置づけ、配置を明確にする。

(図2 看護学科カリキュラムツリー)。

##### 2. 教育課程編成の特色

###### 1) 看護教育における感性教育の重要性

看護学科の教育課程の特色は、感性を基盤とした芸術系の科目を取り入れ、人間の持つやさしさや温かさの基本となる感性の教育を視野に入れたことである。感性とは、心に感じる力、あるいは感じる心であり、美しさ、いのちの尊さ、悲しみ、愛情など心的価値を判断し感じられることである。感性は、芸術はもちろん、科学、医学（スポーツ医学）、法学等、すべてにおいての基本であり、生きていく基盤になるものである<sup>4), 5), 6)</sup>。また感性を育むとは、「感受する」力だけでなく、「表現する」力を伸ばすところまでの一貫したものである。

看護は、対象と看護師の人間関係を基盤として成り立つものである。そのため、看護師は、五感を働かせるだけでなく、それ以上の第六感（直感）も働かせ対象の微妙な変化に気づく鋭い観察力、洞察力、そしてその変化の意味を解釈し、対象の真のニーズを把握できる力が必要である。また看護実践場面はさまざまな人間との触れ合いから、生きるとは何か、生きがいとは何か、病とは何か、死とは何か、人を思いやるとはどういうことかを実感することが多い。このような触れ合いの場では、看護師自身の人間性が対象に影響を及ぼすことも大であり、豊かな感性を備えた看護師が求められるのは言うまでもない。感性の教育とは人間がより人間らしくなり心豊かになることを育成することである。

看護教育において、感性の教育を重視する理由は、近年、技術開発や、業務の効率化や効果、科学的な側面を重視してきたせいも、自分と他者の関係を断絶することで他者を対象化してとらえがちな傾向がみられる。また現代は個々人の心をとどかせる必要のある場合でもそれを避けるようになり人間関係が希薄化している。心の渇いた現代だからこそ、看護に携わる者は、意識的に対象のこころへ眼を向けていく事が大切であり、人間の生き方にかかわる職業だからこそ優れた感性が求められる。

	1年次	2年次	3年次	4年次	【教育目標】
統合科目	看護学の学習を統合し深める				看護の役割と責任を自覚し、かつ、他専門職の人々と協働することができる。 獲得した知識・技能を統合して、問題解決にあたることができる。 研究的態度を身につけ、生涯にわたる自己啓発能力を有している。
専門科目	地域看護学概論	地域看護学方法論Ⅰ	地域看護学方法論Ⅱ 在宅看護学概論 在宅看護学方法論	地域看護学概論 地域看護学実習ⅠⅡ 在宅看護学実習	看護の専門領域の基本的な知識と技能を習得している。 あらゆる対象のニーズに応じた看護を理解している。 科学的思考に基づく看護が実践できる。
	精神看護学概論	小児看護学概論 母性看護学概論	小児看護学方法論 母性看護学方法論 小児看護学実習 母性看護学実習		
	看護学概論 生涯発達看護論 看護技術Ⅰ 基礎看護学実習Ⅰ	成人看護学概論 成人看護学方法論Ⅰ 高齢者看護学概論 高齢者看護学方法論	成人看護学方法論Ⅱ 精神看護学方法論 成人看護学実習ⅠⅡ 高齢者看護学実習 精神看護学実習		
	人体の構造・機能論Ⅰ・Ⅱ 生理学概論 看護学	人体構造・生理機能実習			保健・医療・福祉のニーズに基づいて、地域に貢献できる。
専門基礎科目	リハビリテーション医学	疾病・治療ⅠⅡⅢ 微生物学・免疫学 薬理学 臨床心理学	認知行動学		人間関係を形成し、他専門職の人々と連携するためのコミュニケーション能力を身につけている。
		衛生学 疫学 保健統計学 産業保健 公衆衛生学 学校保健Ⅰ 障害者福祉論 社会福祉政策論 アレルギーコミュニケーション 芸術療法概論 芸術療法実技ⅠⅡⅢ	地域リハビリテーション概論		
教養科目	日本武道文化論 国文学 文化人類学 芸術表現ⅠⅡⅢ 心理学 教育概論 情報処理 情報処理演習 英語Ⅰ 人間関係とコミュニケーション 現代生物学 社会学 スポーツ理論と実習ⅠⅡ ボランティア活動	宗教と文化 日本倫理思想 日本国憲法 英語Ⅱ 中国語 韓国語 地味和専論 国際関係論 現代物理学			感性豊かな人間性と倫理観を備え、人間の尊厳を重視する。

図2 看護学科カリキュラムツリー

豊かな感性を持っていなければ、大切なものを見落としてしまうからである。さらに看護を支える気付きを得るには、こころに眼を向ける意識や感性の豊かさが必要だからである。

## 2) 感性教育の体系化

カリキュラムを検討するにあたり、感性の教育を体系的に組み込むことを考え、1年次は教養科目中の「人間と文化」に位置づけ、「芸術表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の科目を設定し、2年次は専門基礎科目の「人間と健康」に位置づけ、「芸術療法概論」「芸術療法実技Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」、4年次は、統合科目の「看護と芸術」に位置づけ、「看護と芸術Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の授業科目を設定する。なお、感性教育は、芸術系の科目以外でも育成されるが、本稿では芸術系の科目にしぼって述べる。

1年次の「芸術表現Ⅰ（こころアート）」、「芸術表現Ⅱ（書道）」は必修科目、「芸術表現Ⅲ（華道）」を選択科目とする。これらの科目は、芸術における表現の多様性を学び、創造的な時間を通して学生自身が新たな自己の感性に気づくことをねらいとする。「こころアート」は、デッサンの基礎を学び、絵画制作によって基本的な技術や表現を身につけ造形活動を心理療法やリハビリテーションで使用でき、言語を用いることなく自己表現ができることをねらいとする。「書道」は、書の基本を繰り返し練習しながら日本文化の伝統美・文化に関心を深め、書の特性を知り日本語の豊かな書表現ができ、医療人として豊かな心が育み美しく合理的なものをめざす態度を学び、自己の創造力の向上につなげることをねらいとする。「華道」は、豊かな人間性を育むアートや植物との接し方、植物表現の背景を学ぶことによって、人間性を豊かにし人の暮らしに生かしていくことをねらいとする。

2年次の「芸術療法概論」は、植物と人間との文化史的關係を取り入れ、人の暮らしにいかにかに活かしていくかを学ぶことをねらいとする。心理療法の理論的背景と治療的効果を学び、代表的な諸技法（絵画・描画療法、箱庭療法、心理劇、コラージュ療法、音楽療法等）を身につける。「芸術療法実技Ⅰ（心アート）」は、科学的根拠や情報処理だけでなく、主体的美意識や創造的精神の重要性を学ぶことをねらいとする。学生自らがアートに触れることで、芸術の素晴らしさを学び疲れた心を元気にさせる治療的効果を実感する。

「芸術療法実技Ⅱ（書道）」は、書道を通して心の癒しができるようさまざまな用具用材を用いながら書の表現と鑑賞を行う。書を表現する喜び完成させる満足感を体験し心が癒される書作品とは如何なるものかの考究をねらいとする。「芸術療法実技Ⅲ（華道）」は、植物の生氣が人体や健康にどのように良好な状況をもたらすのかを探求し、生きる意欲、安らぎにつながる植物表現のいけばな等、素材や表現方法を活用しながら健全で心豊かな人間性の育成につなげることをねらいとする。

4年次の「看護と芸術Ⅰ（心アート）」は、全ての人間が自由に楽しく学べることを実感でき日常生活に根ざしたアートについて考え、さまざまな日本文化を学び、生活環境の色彩に関心を深めることでよりよい生活環境を志向する考えを育てることをねらいとする。

「看護と芸術Ⅱ（書道）」は、日本の書の特徴を学習しそこに存在する日本のこころについて理解を深める。日本の書に表現される美、感性と美意識が磨かれ優しさのある看護師としての資質を養うようにすることをねらいとする。「看護と芸術Ⅲ（華道）」は、看護、芸術に通用する共通の精神性を探り、植物で表現することが人の内面にどのような良好性をもたらすのかを探求する。様々な自然素材を活かす方法を研究し命の大切さを感知する能力を身につけることをねらいとする。

教育は、そこにかかわる教員の力が大きな役割を占めている。特に芸術を担当する教員の方々には「看護という実践的な支援」にどのように芸術の科目が生かされるかを再認識できるように案内するこ

とが欠かせないことである。また同時に看護学科の教員自身にも、感性の教育に対する認識を新たにすることも重要になってくる。

### 3) 教育課程編成の具体化

#### (1) 教養科目の編成

教養科目は、日本文化を認識し、視野を広げ豊かな人間について学ぶ。また専門職として必要な思考力と感性、さらには国際的視野を備えることをねらいとする。この領域は、「人間と文化」「人間の本質と尊厳」「人とコミュニケーション」「人間と環境」「人間と活動」の5領域で授業科目を設定する。「人間と文化」を理解する領域は、人間の考え方や価値観形成の源泉ともいえる「文化」について広く学び、特に日本文化の心を深く認識することにより人格の涵養をねらいとし、「日本武道文化論」「宗教と文化」「国文学」「文化人類学」等の授業科目を設定する。「人間の本質と尊厳」を理解する領域は、人間の本質について学び、生きることの尊さを深く認識することをねらいとする。「心理学」「日本国憲法」「日本倫理思想」等の授業科目を設定する。「人とコミュニケーション」の基本的知識を修得する領域は、人と人との関係において、心の通いあった円滑なコミュニケーションが求められることから情報伝達における心のあり方、手段・方法等について学び、人間関係のあり方や国際人としてのコミュニケーション能力の習得をねらいとし、「人間関係とコミュニケーション」、「情報処理」「英語」等の授業科目を設定する。「人間と環境」について基本的知識を修得する領域は、自然や社会環境を多面的に理解し、地球環境問題をはじめ現代社会が直面する基本的な諸課題について総合的に判断できる能力を養うことをねらいとし、「社会学」「地球環境論」「国際関係論」等の授業科目を設定する。「人間と活動」について体験学習する領域は、人間の健康・文化・社会活動を実践し、その心を理解することをねらいとし、「スポーツ理論と実習」「ボランティア活動」等の授業科目を設定する。

#### (2) 専門基礎科目の編成

専門基礎科目は、看護学に必要な保健医療福祉の知識や技術を学ぶことをねらいとし、この領域は、「人体の構造と機能」「疾病の成り立ちと回復の促進」「人間と健康」の3領域で授業科目を設定する。「人体の構造・機能」を理解する領域は、看護の対象である人間の形態や機能等を学び、人間を理解するための基本的知識を修得することをねらいとし、「人体の構造・機能論」「生理学総論」「栄養学」等の授業科目を設定し、さらに「人体構造・生理機能実習」を設け、人体の理解を深められるようにする。「疾病の成り立ちと回復の促進」を理解する領域は、人間の健康・疾病・障害についての基礎的概念を理解した上で、疾病をもつ人や障害のある人を援助するために看護職として必要な知識を修得することをねらいとし、「臨床心理学」「認知行動科学」「疾病・治療」「薬理学」「微生物学・免疫学」等の授業科目を設定する。「人間と健康」を理解する領域は、集団の健康を把握し、地域の保健医療福祉を遂行し、必要な管理調整能力や総合的な判断力を養うための健康の概念や保健医療システムについての基礎的知識を修得することをねらいとし、「疫学」「保健統計学」「公衆衛生学」「社会福祉政策論」「地域リハビリテーション概論」等の授業科目を設定する。さらに本学の教育課程の特色である「芸術療法概論」「芸術療法実技」の授業科目を設定する。

#### (3) 専門科目の編成

看護学の基礎を学ぶとともに、看護の専門職として必要な知識と技術を学ぶ。さらに教養科目及び専門基礎科目で得たものを活用し、科学的探究心及び自己啓発能力を育むことをねらいとする。この領域は、「看護の基盤」「健康支援看護学」「リプロダクティブヘルス看護学」「地域・在宅看護学」の

4領域に大別する。また、各看護学の専門領域に授業・演習・臨地実習を配置し、学内での学習を学外の実践で統合し効率的かつ段階的に深められるように編成する。なお、臨地実習は別項で述べる。

「看護学の基盤」を理解する領域は、専門看護学の普遍的、基礎的な能力を育成するための知識や看護を実践するための基本的な技術を修得することをねらいとする。

看護は、実際にケアする過程において科学的根拠にもとづく専門的な知識・技術、判断能力、責任能力が求められる。そのため、自ら考え判断する力を支える基盤としての知識がげあるから、各教科において、「思考・判断」を最も重要視する。また看護技術の習得と並行して看護の基盤である人間関係の形成について体験学習から学べるよう少人数制で演習を展開する。「看護学概論」「生涯発達看護論」「看護技術」「看護過程」「ヘルスアセスメント」等の授業科目を設定する。「看護学の基盤」の分野は、専門看護学の導入として位置づけ、看護学を学ぶ意味、専門職業人としての看護、看護技術論、健康論、生涯発達論等、看護学の概要について学ぶ。

「健康支援看護学」を理解する領域は、疾病の急性期から回復期、慢性期、終末期、健康維持期にある老若男女の健康状態に応じた看護について学び、さらに地域・在宅看護学に関連づけられることをねらいとする。「成人看護学」「高齢者看護学」「精神看護学」（臨地実習を含む）の授業科目を設定する。専門看護学では、各発達段階に応じた専門看護学概論や援助方法論等、の看護理論と実践を学ぶことをねらいとする。

「リプロダクティブヘルス看護学」を理解する領域は、人間の成長・発達段階の視点から母性や小児を捉え、ライフサイクルや健康問題の特性について学び健康支援が実践できることをねらいとする。「母性看護学」「小児看護学」の授業科目を設定する。既習した「生涯発達看護論」や未学習の「看護倫理学」等に応用できるようにする。

「地域・在宅看護学」を理解する領域は、在宅療養者の抱える諸問題やその家族のニーズや地域・学校・職場を含む地域社会の特性とニーズに対応できる専門知識、技術を習得する。また在宅看護の実践や職場・学校での看護活動を通して他の専門職との連携・協働について学ぶことをねらいとする。「地域看護学概論」「地域看護方法論」「地域看護管理論」の授業科目を設定する。

#### (4) 統合科目

統合科目の領域は、既習した看護学にまでさかのぼって考え（分析）、それらの相互関係をたどり看護学の全体像を再構成してみる（総合）思考方法ができるようにする。また総合的に専門職として必要な専門的知識と技術を修得し、新しい看護の見方や考え方を学びこれからの看護を考えることをねらいとする。この領域は、「チーム医療と看護」「統合看護学」「看護と芸術」の3領域に大別する。「チーム医療と看護」を理解する領域は、チーム医療と看護の役割拡大に応じた医療提供体制や看護のあり方を考えるために必要な知識を修得することをねらいとし、「がん看護」「災害看護論（救急法を含む）」「医療安全支援論」「国際看護論」「看護情報学」等の授業科目を設定する。

「統合看護学」を理解する領域は、専門看護学に共通する内容およびこれまで学習した内容を統合し深めることをねらいとし、「看護教育学」「看護倫理学」「看護管理学」「看護政策論」「看護研究概論」「看護研究（課題研究）」「統合実習」の授業科目を設定する。特に、「看護研究（課題研究）」は、自ら体験した看護実践から課題を明らかにし研究プロセスおよび卒業後臨床に活用できる実践能力を学ぶ。また課題計画を「統合実習」で実践し、看護の専門性を追究することをねらいとする。

「看護と芸術」を理解する領域は、本学が掲げる基本理念である「医療と芸術の融合」を具現化する

ために、これまでの芸術系科目を通して育んだ感性と態度、看護学との関連性を追究し、創造力を高めることをねらいとし、「看護と芸術Ⅰ（こころアート）」「看護と芸術Ⅱ（書道）」「看護と芸術Ⅲ（華道）」の授業科目を設定する。

#### (5) 臨地実習の考え方と構成

臨地実習は、看護基礎教育の目標を達成するための教授法のひとつである。看護理論だけでは、対象の健康問題を解決することはできない。看護は対象とかかわることによって看護実践能力が身につく、看護観が形成され、専門職業人としての意識が自覚されると考える。対象と直接かかわる体験ができる実習は、学内で学べない知識や技術を身につけられる教育の場であり意義が大きいと考える。その意義は、学生と異なる年齢層や人生経験豊富な人、物の見方や考え方の異なる人、真剣に病気と向き合っている人等、さまざまな対象との出会いから、健康の大切さ、生きる意味、病む苦しみを学び、人間的に成長できる場となる。また学内で学んだ知識や技術、態度を身をもって体験することによって知識不足や技術の未熟さ、人間関係の難しさに気づく機会になる。実践した看護に対する対象の反応から看護の喜び、充実感、満足感、責任感が生まれるのも実習である。また学生によっては、何を行っても上手くできず看護に向いていないのではと適性に悩む。逆に看護のやりがいがあり職業意識にめざめ、学習の動機づけになることもある。実習は、講義と異なり常に個々の考えや判断が問われ、しかも自分の考えを表明することが必要になる。対象の理解から健康状態をアセスメントし看護上の問題を明確にし、いろいろな看護方法から個別に合った具体策を選択し、看護目標を設定し看護を実践、評価する一連のプロセスから、判断能力、問題解決能力、応用力が養われ、個別看護が修得できる機会になる。

臨地実習は、図3に示すように基礎分野と専門分野、統合分野で構成する。1年次の「基礎看護学実習Ⅰ」は、看護の基本を学ぶ。また医療施設の看護実践場面を見学体験することにより看護への興味・関心、理解を深め、専門看護学に対する学習の動機づけをねらいとする。2年次の「基礎看護学実習Ⅱ」は、日常生活の援助を通して看護家庭の展開を学ぶことをねらいとする。3次および4次の「成人看護学実習（急性期）」、「成人看護学実習（慢性期・回復期・終末期）」、「高齢者看護学実習」、「小児看護学実習」、「母性看護学実習」、「精神看護学実習」、「在宅看護学実習」は、ライフサイクルや健康状態に応じた看護の実践方法を医療機関や在宅において学ぶことをねらいとする。4年次の「地域看護学実習Ⅰ」、「地域看護学実習Ⅱ」〔選択科目〕は、地域看護の実際や学校保健、産業保健を学ぶことをねらいとする。「統合実習」は、看護の発展・統合させる基礎を学ぶことをねらいとする（図3臨地実習のねらいと構成）。

## V. 入学者選抜の考え方

看護学科は、健康科学部の一学科として設置されていることから、健康科学部の入学者選抜の基本指針の1)本学の開学理念を理解している、2)保健医療福祉を学ぶ確固たる意思を有する、3)他者とのコミュニケーションを円滑にとることができるの三つの条件を基本とする。これらに加え、看護学科の「アドミッションポリシー」として、①本学の開学理念である「自立・連帯・希望・友愛」の精神を理解できる者、②保健・看護・福祉分野からの要請に応える新たな価値を創造し、学生自身のキャリアデザインに向けた行動ができる者、③看護の対象から学び、科学的根拠のもと自律的な看護の提供を目指す者とする。

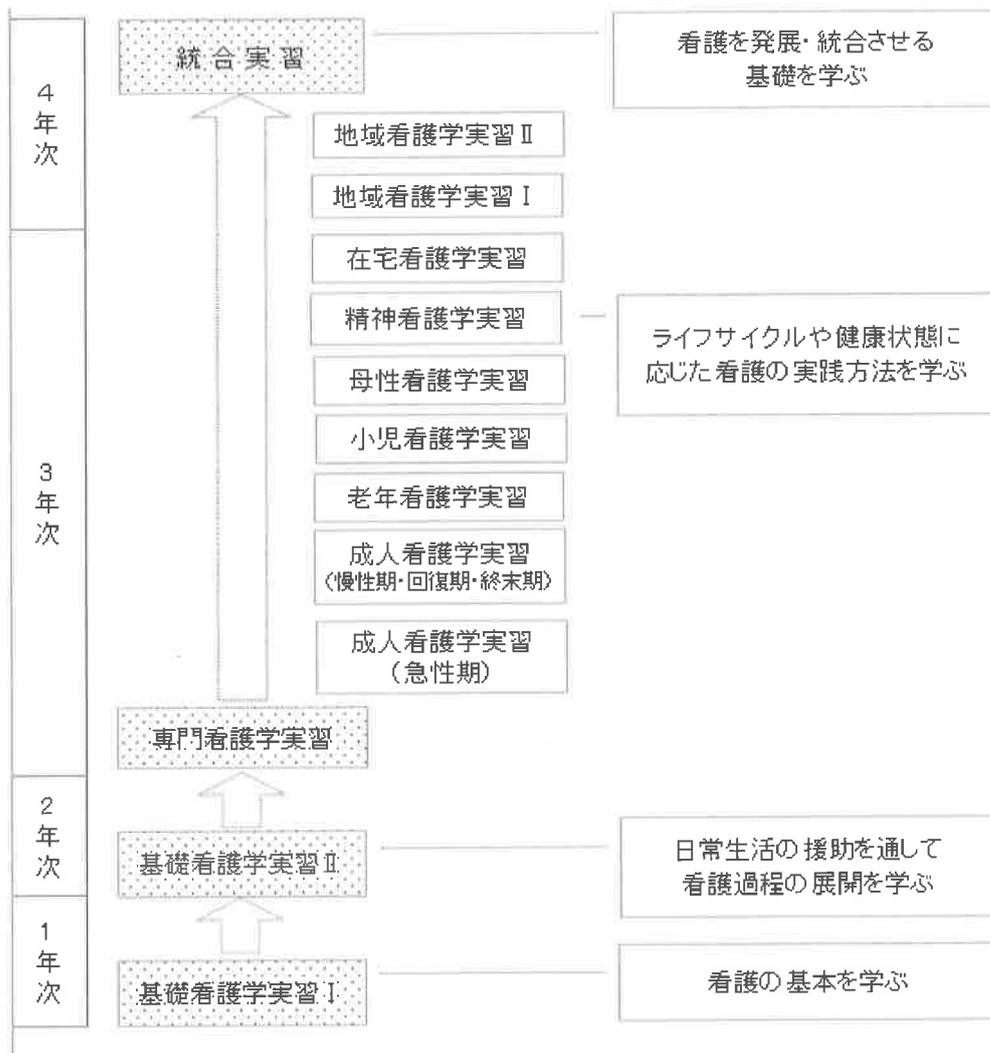


図3 臨地実習のねらいと構成

## Ⅵ. 卒業要件

本学科の卒業要件は、必修科目107単位、選択科目21単位（教養科目の選択科目から10単位、専門基礎科目の選択科目から8単位、統合科目の選択科目から3単位以上）を修得し、計128単位以上修得することとしている。修得科目の登録の上限は、年間38単位とし、学科の課程を修了した者は、看護師国家試験受験することができる。なお、保健師や養護教諭1種の受験資格は別途に定めている。

## Ⅶ. 看護学科の教育方針

看護学科では、学生の指導にあたり「自律・自立の精神」および「知探心技の精神」の精神を掲げ、教員間の共通の指導指針としている。学生指導においては、ひとりひとりの個性を尊重し、可能性を信じて、自己実現できるよう支援することが私達に課された使命と考えている。また学生の自己管理能力を高め、学習方法を身につけられるような指導を重視している。「自律・自立の精神」とは、1) 学習マネジメントができる（自らの学習状況を整理し学習履歴を記録、自習管理できる。受動的・記憶中心の学習ではなく、自ら課題を発見し解決の道筋を考え能動的・自主的な学習ができる）。2) 健康マネジメントができる（自己の健康状態を記録し、常に健康を意識し心身のバランスを整えることができる）。3) 生活マネジメント

ができる（これまでの生活を振り返り、社会の一員として適切な生活習慣を身につけることができる）で、少人数制の指導体制で学生を支援している。「知探心技の精神」とは、1) 学問（看護学）を通して真理を探究する喜びや楽しみを実感できる。2) 人間を探究するとともに、自他を知り心豊かになることができる。3) 新しい、未知の看護技術を探究し看護の専門性を極め学びの姿勢を涵養することである。

## VIII. おわりに

看護学科は、平成23年4月に開設したばかりである。そして本稿で述べた教育課程を現在、実践している。教育課程の特色として感性の教育に焦点をあてて述べたが、このことは、他学科にも共通するものであり、折に触れて感性教育の研修・研究を組んでいくことが教員研修の課題である。また看護学科は高校生から大学生という過渡期の段階にある学生の教育もやっと落ち着きを取り戻したばかりである。教育課程を大学や健康科学部の教育目的に沿って編成はしたが、感性教育の評価というのはまだまだこの時期には困難である。初年度の教育課程および教員のかかわりがどのように学生に影響を及ぼすのか、卒業後、他大学との違いは何かについても、今後検証していくことが期待されるであろう。さらに教育課程には含まれていない、大学全体の持つ自由で感性豊かな雰囲気の中での教育が本大学の隠れた教育課程であることは間違いない。そのためにも看護学科のみならず、教職員一同が、それぞれ感性を磨き、学生に丁寧に対応していくことが重要であろう。この教育課程の編成の考え方や特色が、学生にとって教育効果があるか否かを持続的に評価し、次年度の改善に生かしよりよい教育課程の編成をすることが今後の課題である。

## 文献

- 1) 学士課程教育構築，中央審議会答申(2008)
- 2) 大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方策について」答申－競争的環境の中で個性が輝く大学，(1998)
- 3) 厚生労働省(2008)「看護基礎教育のあり方に関する懇談会」。
- 4) 遠藤 友麗(1997) いま，なぜ，感性教育か，現代のエスプリ365：5-18.
- 5) 志木 幸子(2003) アスリートの感性研究へのアプローチ，早稲田大学大学院人間科学研究科博士論文：20-38.
- 6) 志木 幸子(2003) 感性の仕組みと働き，臨床スポーツ医学20(9)：1061-1070.

(平成23年11月30日稿)

査読終了年月日 平成23年12月19日